

『菅家文草』卷三注釈稿(三)

佐藤信一

校異に用いた略号を確認しておく。

【略号】

- 〈内A〉…内閣文庫A本(底本)
- 〈川口〉…川口久雄氏旧蔵本
- 〈内B〉…内閣文庫B本
- 〈尊A〉…尊経閣文庫A本
- 〈尊B〉…尊経閣文庫B本
- 〈尊C〉…尊経閣文庫C本
- 〈尊D〉…尊経閣文庫D本
- 〈蓬左〉…蓬左文庫蔵本
- 〈別雷〉…賀茂別雷神社蔵本
- 〈道A〉…道明寺天満宮蔵A本
- 〈多A〉…多和文庫A本
- 〈多B〉…多和文庫B本
- 〈東A〉…東大所蔵A本
- 〈東B〉…東大所蔵B本
- 〈京A〉…京大所蔵A本
- 〈京B〉…京大所蔵B本

- 〈陽明〉…陽明文庫蔵本
- 〈資A〉…京都府立総合資料館蔵A本
- 〈資B〉…京都府立総合資料館蔵B本

【本文】

188 中途送_レ春(以下二首行路之作)

春送_二客行_一客送_レ春

傷_レ懷四十二年人

思_レ家淚落書齋舊

在_レ路愁生野草新

花爲_レ隨_レ時餘色盡

鳥如_レ知_レ意晚啼頻

風光今日東歸去

一兩心情且_二附陳_一

【校異】

客送_二送(客一字欠字、右傍ヨリ補入ス)〈尊C〉、思_二思(川口)齋_二齋(異体字注記アリ)〈別雷〉、舊_二一字欠(尊D)曰(道A)盡_二書(蓬左)且_二且(尊A)〈尊B〉(尊C)

● ○ ● ● ● ○ ● ○ ● ○
平起り。七言絶句。上平声七虞韻。

【訓読】

189 途中に中進士に遇ひ便ち春試二三子を訪ふ

遇 知友の中途に立つのに逢ふ

便ち 諸生の舊儒を怨むを謝す

補逸書の篇三百字

(補逸書試に之を題す)

記か一の明珠を得たるかを知らず

【注釈】

◇遇：たまたま、の意。元稹「褒城驛二首(二)」に「憶昔萬

株梨映竹、遇逢黃令醉殘春」とあるのは、中国での用例。

釋大典の「文語解」に「遇タマノ本義ヨリメ、轉ズ。遇く有、

以夢得事曰上者と、韓父柳子厚墓誌、遇く馬摠以鄭滑府

佐忤中貴人、薛戎墓誌コレナリ」とある。

◇知友：知り合い。「史記」「酷吏傳」「務在絶知友賓客之

謂」とある。

◇中途：路の半ば。李白の「敍舊贈江陽宰陸調」に「中途

不遇人、直到爾門前」とある。

◇謝：第一義に、あやまる、転じて宥める。第二義に、聞き入

れる、許す。ここは第二義で採った。用例に「禮記」「曲禮上」

の「大夫七十而致事、若不待謝、則必賜之几杖」「鄭注」

に「謝、猶聽也」があつた。

◇諸生：大学寮に所属する弟子のこと。「史記」「曹相國世家」

に「盡召長老諸生、問所以安集百姓如齊故俗」とある。

◇舊儒：年老いた名望のある学者。杜甫「贈左丞韋濟」に

「左轉頻虛位、今年得舊儒」とある。

◇補逸書：「白氏文集」卷四六「書頌議論狀」に収める文章。

「三百字」とは五言三十韻の詩を言うか。

◇詎：「新撰字鏡」の「詎」の項にタレカと和訓が付されてい

るところから解釈した。また多和文庫A本はこを「誰」とす

る。「白氏文集」卷五二「和管新酒」に「殆欲忘形骸、詎知

屬天地」とある。清、劉淇「助字辨略」卷四に「與・距・

巨・鉅・渠・竝通」とする。ただし同義の「鉅」をとりあげて

「愚案此鉅字猶云何也。(中略)鉅得爲何者、豈之轉也」

とする。もともとの語義は「誰」とは異なるようである。

◇明珠：光る玉、転じて優れた人の謂。「梁書」「劉孺傳」に

「孺、字孝稚、七歲能屬文、年十四居父喪、毀瘠骨立、宗

黨咸異之、服闋、叔父頊爲義興郡攝以之官常置坐側、

謂賓客曰、此兒吾家之明珠也」とある。ところで、この表現

は元稹の詩にいくつか用例が見いだせる。「酬樂天東南行詩

一百韻」に「擺囊看利穎、開坼出明珠」、また「酬孝

甫見贈十首(一〇)」に「開坼新詩展大珍、明珠炫轉玉

音浮」とあり、「採珠行」に「海神採珠珠盡死、死盡明珠空

海水」とあつた。

【口語訳】

189 任地に赴く途中で中進士に遇った、そこで春試がどうな

つたか二三人の結果を聞いた
たまたま知り合いと道中で行き会った
そこで弟子達が年老いた学者の出題をうらむのを聞いてや

った

補逸書（補逸書）の篇で三百字の五言詩を書けというのが問題だった

と言うが

（補逸書は試験問題で出題された）

そんな古めかしい問題で一体誰が一人でも明珠、優れた人材を得たのかはわからない

【考察】

「補逸書」の全文は「湯征諸侯、葛伯不祀、湯始征之。作湯征。葛伯荒怠、敗禮廢祀。湯專征諸侯、肇徂征之。湯若曰、格爾三事之人、逮于有衆、啓乃心、正乃容、明聽予言。咨先格王有彝訓曰、祿無常荷、荷于仁、福無常享、享于敬。惠乃道、保厥邦、覆乃德、殄厥世。惟葛伯反易天道、怠棄邦本、虐于民、慢于神。惟社稷宗廟、罔克尊奉。暨山川鬼神、亦靡煙祀。告曰、罔犧牲以供俎羞。予畀厥牛羊、乃既于盜食。曰、罔黍稷以奉粢盛。予佑厥稼穡、乃困于仇餉。今爾衆曰、葛罪其如。予聞曰、爲邦者、祇奉明神、撫綏蒸民、二者克備、尚克保厥家邦。吁、廢于祀、神震怒、肆于虐、民離心。頃繩契以降、暨于百代、神怒亟民叛而不顧隣者、匪我悠聞。小子履、以涼德欽奉天威、肇征有葛。咨爾有衆、克濟厥功。其有傲師徒、戒車乘、敬君事者、有明賞。其有罔率職、罔勦力、不襲命者、有常刑。明賞不僭、常刑無赦。嗚呼、朕告汝衆、君子監于茲。欽哉懋哉。罰及乃躬、不可悔」というもの（補逸書）の本文は朱金城氏校注「白居易集箋校」に拠る）で、「書経」「湯誓」篇の「爾尚輔

予一人、致天之罰」（爾尚なほ輔たすケテ、天之罰ヲ致セ）を補つて作られた作。川口大系は「三百字」とあるのは五言三十韻の古調詩のこととする。ただ詩の形式のみならず、「補逸書」の内容自体にも「其有傲師徒、戒車乘、敬君事者、有明賞」、また「其有罔率職、罔勦力、不襲命者、有常刑。」といったアナクロニズムにもなり兼ねない内容を含んでいたことも考慮したい。

【本文】

190 得二故人書一以詩答之（以下冊四首到州之作）

拆封知再（再）王ヲ見セ消チテ改ム改風光

讀未三行涙數行

先悶秀才占夏月

（傳聞藤秀才五月可策試）（頭注ニ「秀才春海」ト注記ス）

更思進士泥春場

寄身雖苦爲南郡

投歩猶安自北堂

努力君心能努力

存亡應在此文章

【校異】

冊：卅《尊A》《尊B》《尊D》《別電》《道A》《多A》、三十

《尊C》《多B》《東A》《東B》《京B》《陽明》《資A》《資

B》、拆：一字欠《尊D》拆〔右傍ニ「拆イ」ト注記ス〕《別

電》拆《多A》拆〔右傍ニ「サイテ」ト注記ス《京A》《京B》

《資A》、占：古《蓬左》、春海：吞海《京A》《陽明》、思：思

火、以照書」とある。

◇藤秀才：頭注に「秀才春海」とあるように、藤原春海。「尊卑分脉」に拠れば「内鷹、曾孫、從五位上、大學頭、文章博士、越後掾、母參議滋野貞主女」とあり、「二中歴」の第二に「文章博士、(藤)春海、延喜二七、從五上」とある。

◇泥：文化五年刊松本愚山撰「譯文須知」虚字部卷三「ナツム」の項に、「泥、モタレノアル」ナリ。論語「雖小道、有可觀、致遠恐泥」とある。また、九条本「文選」所載の孔德璋「北山移文」の「泥滯荷且」への古訓に「ナツミト、コホリテ」とある。「なづむ」と訓読しておく。

◇春場：春の穏やかな場所の謂いか。転じて、生温い場所の義か。李商隱「公子」に「春場鋪_二文帳_一、下馬雉媒_レ嬌」とある。

◇南郡：本来は郡名。秦が置く。湖北省。ただここではこれから赴く讚州に喩えたものであろう。「史記」「項羽紀」に「義帝、柱國共敖、將兵擊_二南郡_一、功多、因立_レ敖爲_二臨江生都江陵_一」とある。「白氏文集」卷五二「和_二微子_一」の「和_二李勢女_一」に一七・一八句「南郡忽_レ感激、却立_レ捨鋒_二鈍_一」及び二五・二六句「南郡死已久、骨枯墓蒼蒼」とある。

◇投歩：六朝宋孝武帝「拜_二衡陽文主義季墓_一」に「投_レ歩矜履_レ、躡_レ舉_レ目增_レ凄清」。ただし「投足」の方が一般的に見られる表現。「白氏文集」卷六六「香山下_レ居」に「山下初_レ投_レ足、人間久息_レ心」とある。平仄上は「歩」も「足」も仄声であり問題はない。またここでの「歩」と「身」を番える表現は道真自身が「書齋記」で「投_レ歩者進退傍行、容_レ身者起居側_レ席」と用いている。

◇北堂：後出の文章院と同義か。先例は「白氏文集」卷九「秋懷」に「月出照_二北堂_一、光華滿_二階墀_一」とある。

◇努力：努める。また、そのこと。李陵の「與_二蘇武_一」「努力崇明德、皓首以爲_二期_一」、「白氏文集」卷一〇「寄_二微之_一」(三)「努力各自愛、窮通我爾身」など。多和文庫B本などの刊本の送り仮名から「ツトメヨ」と訓じた。

◇南海：南方の海。「詩經」「大雅 江漢」に「干_二疆千理_一、至_二干南海_一」とある。また「白氏文集」卷五六「廣府胡尚書頻寄_レ詩、因答_二絕句_一」には「尚書清白臨_二南海_一、雖_レ飲_二貧泉_一心不_レ回、唯向_二詩得_二珠玉_一、時時寄_二到帝鄉_一來」とあり、当該詩ではないのだが、直前の一八九「途中遇_二中進士_一便訪_二春試_一二三子」の結句、「不_レ知言巨得_二明珠_一」との類似が注意される。

【口語訳】

190 旧友の手紙を得た、詩でもつてこれに答えた(これ以下の四十四首は州に到着してからの作)

封を開いてみて季節が変ってしまったのをもう一度知った
手紙を読んでまだ三行もいかないうちに涙は数行流れてしま
っている

第一に秀才の試験に於いてある学派が合格者の大半を占めた
ことを憂える

(傳え聞いた所では藤秀才が五月の試験の出題者だそうだが)
さらに進士の学生がぬるま湯になじんでしまうであろうこと
を情けなく思う

この身を寄せているのが南の異郷であるが故に苦しむと言っ
ても

歩みを投ずればなお都の北堂、文章院から始まって気持ちも安らかになっていくようだ

努力してくれ給え君の精神ならきつと努力出来る筈だ

我々の存亡はきつとこの学問に在るに違いないのだから

【考察】

卅四首とあるのは、卅四首に改めるべきかもしれない。三四首なら二二四番の「春盡」まで、また四十四首なら二三四番の「得倉主簿寫情書、報以長句、兼謝州民不歸之疑」となるが、この詩は自注に「以下乞暇入京之作」とある通り制作事情が異なる。ただ「以下」が当該詩を含むものとすれば、二二三番「觀曝布水」となり、「到州」以下の叙述が一段落した後の切れ目にふさわしいと思われる。

また「投歩猶安自北堂」の「自」も「省」の方がわかりやすいが、諸本の大半で「自」に作る。ヨリで読んでみた。対になる「爲」も助詞として、タメと訓じた。

〈付記〉注釈の作成にあたって、諸本の翻刻・調査・紹介を快諾して下さった内閣文庫・尊経閣文庫・東京大学付属図書館・京都大学付属図書館・賀茂別雷神社・陽明文庫・多和神社・蓬左文庫・道明寺天満宮・京都府立総合資料館・川口氏の各位に、深謝申し上げます。ありがとうございます。

(本学助教授)